體育會スキー部 記録更新続く
49年ぶり個人優勝も

慶大體育會スキー部が快挙を達成した。2月24日から27日まで秋田県鹿角市花輪スキー場で行われた第93回全日本学生スキー選手権大会（以下、インカレ）にて、男子チームは31点を獲得し、一部15校中総合6位入賞を果たした。一部での31点は慶大體育會スキー部95年の歴史で最多得点であり、慶大が一部に残留したのは49年ぶりであった。

好成績を残したスキー部

インカレは、アルペン、コンバインド、ジャンプ、クロスカントリーの4種目で構成されている。この4種目の合計ポイントにより順位が決まり、慶大は31点を獲得した。総合得点で早大を上回ったのは50年ぶりとなった。特に活躍が目立ったのは、男子コンバインドで優勝した小林朔太郎（環1）だ。インカレ一部での個人優勝は49年ぶりである。小林は「40人近いOBが大会に来るなど、いつもとは異なる独特の雰囲気だった。スキーは個人競技であるが、インカレはチームのために戦う団体戦。チームの結果に貢献できてとても嬉しい」と振り返った。

スキー部の活躍はインカレだけではない。2月11日に行われた第98回全日本スキー選手権大会では、五十嵐柴乃（法2）がスーパー大回転で優勝した。

また、2月17日に行われた第75回国民体育大会冬季大会スキー競技会において、久保田拓（環3）がアルペン大回転で優勝した。慶大スキー部員として優勝したのは47年ぶりとなる。「悪天候の中、いつもの自分の力を発揮できた。平常心を保てたのが良かった」と話す。

インカレ一部で戦えるチームに成長した慶大體育會スキー部。「初のインカレ総合優勝」という目標に向けて、挑戦は続く。

（浅川力哉）

「学生であふれるスタンドを、学生の手で」
体育会生が創設 K-Projectとは

K-Projectと呼ばれる学生団体が慶大にあるのをご存じだろうか。元蹴球部主将で、創設者の1人である古田京さんに話を聞いた。

K-Projectとは

「学生であふれるスタンドを、学生の手で」というコンセプトのもと、体育会生が創設した団体だ。「慶大の体育会の試合に、どのようにして慶大生を呼ぶか」という目標を掲げ、2018年2月から活動している。今年度から体育会本部の活動に組み込まれることが決定している。

発足の経緯

蹴球部の早慶戦では約2万人の観客が訪れる。一方で、その大半を保護者などの学生以外が占めており、「自分たちの試合を、もっと多くの慶大生に観に来てほしい」と感じていた。それは他の部活も同様であり、慶大の体育会全体の問題となっていた。そこで現状を変えるべく、有志で集まって創設した団体がK-Projectだ。

古田京さん

KEIODIARYについて

K-Projectが取り組んでいる活動の一環に「KEIODIARY」というものがある。体育会生は部活単位でのつながりが強く、他の学生との関係が薄いのが現状だ。そこで、競技や所属を超えた学生の交流促進の場として行う活動が「KEIODIARY」である。

企画内容は主に二つある。一つ目は、体育会各部の紹介だ。知名度がそれほど高くない部活を取り上げるだけでなく、「激しさ」という体育会の良さを発信している。二つ目は、さまざまな塾生の紹介だ。自分たちのそれぞれの活動に対し、目的意識を持って取り組む慶大生を取り上げている。

今後の目標

人が試合会場に足を運ぶ時、「興味」「欲求」「行動」という様々な段階がある。その一つ一つの段階に応じた適切な施策を練ることが必要不可欠だと古田さんは話す。

また、慶大の体育会の良さは「試合会場の一体感で、自分が慶大生であることを感じられる」ことだとする。「原点に回帰して、施策を考えたい」と熱く語った。

（浅川力哉）

体育会 主将インタビュー

今年も目が離せない体育会。今月号では、４人の主将に今シーズンの想いを聞きました。

野球部 瀬戸西 純

目指す主将像

練習への気持ちや態度でチームを引っ張り、自分の経験を少しでも多く言葉で伝える。このような「チームと共に強くなる主将」でありたいと考えています。

アメリカでのキャンプ

ダイヤモンドバックスの傘下チームとの試合に、メジャーリーガーがコンディション調整で出場していました。アメリカでのキャンプでは、そのような第一線で活躍する選手の一球一打席への気持ちの入れ方を肌で感じることができました。

新たなチームの雰囲気

主軸を担っていた4年生や安定した投手陣が抜けぬけ、もちろん不安はあります。しかし、昨年の日本一の重圧を感じることなく、新しいメンバー・監督で新たなチームを作り、もう一度日本一を獲ろうという気持ちの切り替えができています。

また、今年は監督が変わり、野球を楽しくプレーする選手が増えたと感じています。ベンチや守備の時のチームの雰囲気にも注目してほしいです。

主将になっての変化

練習の姿勢、発言といった自分の態度が、部員全員に見られているという意識が生まれました。とはいえ、自分は今までも4年生の陰からチームを支えるという思いでいました。それを表立ってやるようになっただけで、今までと基本的な部分は変わっていないと思います。

今年の目標

個人としては、六大学リーグで優勝することが大きな目標です。自身の成績よりも、チームが勝つことを第一に考えています。

チームとしては、ここ数年勝ち点4で行き詰まっています。勝ち点5での完全優勝の先に、日本一という目標が生まれてくると思っています。完全優勝と日本一が今年の目標です。応援よろしくお願いします。

（聞き手 吉澤莱々美）

ソッカー部 松岡 瑠夢

新主将を務める心境

最初は主将を務めることに前向きではありませんでした。しかし、主将に指名されたということはそれだけの責任もあり、期待されているということ。同期やスタッフの期待に応えられるように日々頑張りたいです。

また、自分はFWというポジションで主将を務めます。苦しい時には「得点」という形でチームを救うことができる、勝負強いキャプテンが理想です。

ピッチ内外での役割

ピッチ内では、チームを勝たせること・苦しい時にチームを救うことが主な役割だと考えています。ピッチ外では、他の学生スタッフなどと連携して、隙のない一体感のあるチームを作ることが求められていると思います。

昨シーズンを振り返って

昨シーズンはチームとして3バックを採用していました。このフォーメーションでは選手に頭脳が求められます。今まで3バックでのプレー経験がなかったので、以前より頭を使うようになりました。個人としては、そのような点が少しは成長したと考えています。

また、監督からの「一日一日を大切に」という言葉を自然と守り、一日も妥協しませんでした。その結果、日を追うごとにチームが良くなっているという実感がありました。

来シーズンの目標

チームとしては、インカレ出場・早慶戦勝利・夏のアミノバイタルカップで全国への切符を勝ち取るという三つの目標を掲げています。これらの目標の達成には関東リーグで18得点は必要だと考えていて、FWとして特に意識しています。自分のプレーで部員やチームを牽引し、シーズンを戦っていきたいです。応援よろしくお願いします。

（聞き手 紫関陸）

蹴球部 相部 開哉

主将についた気持ち

蹴球部では、同期からの投票で主将が選出されます。自分が主将に選出された時、かなりプレッシャーを感じ、ネガティブに捉えていました。しかし、「プレーで体を張ってくれる」「ピッチ外でもきっちりしている」など、同期からの温かい言葉を受け、自分は信頼されていると強い自信になりました。

リーダー像の変化

主将につく前、あるべきリーダー像とは、誰よりも声を出し自分から周りを引っ張っていくことだと考えていました。しかし、自分にとっての理想的なリーダー像は「プレーで周りから信頼を得る存在」だと今は考えています。言葉で発信しなくても、自分のラグビーに対する姿勢を見せ続け、周囲の人を巻き込んでいくことが重要だと考えています。

昨シーズンを振り返って

とても不甲斐ないシーズンでした。昨年は、主将・副将を支える役割として「ポジションリーダー」を務めました。主将になってから昨年を振り返ると、自分のプレーだけに集中していたと感じます。それが許されるのは1、2年生まで。自分のパフォーマンスが良いことは前提で、加えて下級生を引っ張っていくことが必要だったと痛感しています。

今シーズンのチームの特徴

監督が変わり、昨シーズンは選手に自主性が与えられた練習メニューが多かったです。その分練習に緩みが出てしまい、思うような結果が出ませんでした。主体的に練習に取り組むことが理想ですが、昨年の失敗を活かして、「自らを厳しく律する」ことを目標としています。

今シーズンの目標

細かいことにこだわるチーム作りを目指します。ピッチ内外で細かいことに気を使えるチームは、必ず成長できます。「大学選手権優勝」を果たし、日本一になることが大きな目標です。

（聞き手 浅川力哉）

バレー部 吉田 祝太郎

バレー部の主将として

自分は元々厳しく後輩と接するタイプですが、そういう指導では「うまくなりたい」という自主性が生まれません。まずは後輩の意見を尊重し、自主性を育む環境を作ることに努めています。部員から不信感を抱かれてはおしまいだと思います。「あの人の決定に従って大丈夫?」という状況になってしまうと部は崩壊します。

自主性を重んじるとはいえ、大事な決定を下すのは主将と主務。みんなから信頼感を得ることが主将として大切だと思います。

早慶戦にかける思い

思いはとにかく強いです。しかし、入部以降3年連続で敗戦です。特に去年はフルセットであと2点取れば勝ち、というところから逆転され、本当に悔しい思いをしました。年を経るにつれ、大学を代表して戦う「慶應プライド」のようなものをくすぐられてきます。やはり、他の試合と早慶戦は違います。どうしても勝たなければならないですから。

今年のチームの目標

日本一になることです。バレー選手全員のあこがれである全日本インカレに出場し、テレビ中継される中、センターコートでプレーするのが目標です。一部昇格は通過点にすぎません。応援よろしくお願いします。

（聞き手 水口侑）

LINE @
@684kwagp

塾総 Twitter
@JRI_Reshruit

慶應履修情報誌
日吉東急 avenue 南館３F
天一書房で好評発売中！

一緒に雑誌を作ろう！！
塾生総合研究所

Campus Idol
経済学部 経済学科１年 小林柾慶さん

今月のキャンパスアイドルは、小林柾慶さん（経1）。彼は、理工学部体育会サッカー部に所属している。幼いころからずっとサッカーが好きで、今でも休日はずっと練習に励んでいるとのことだ。

しかし、大学に入って環境が変わり、新しく人と話す機会が増えたためか「最近では人と話すことが新しい趣味かもしれない」とも彼は語る。友達と話すにあたっては「信頼100%」を大事にしているのだとか。

「大学に入って友達を増やしたいというのもあるけれど、友達と信じあって人は生きていると思うし、自分が信じなければ何も始まらない」と強く感じているという。

そんな思いもあってか、将来の夢は「人と人をつなぐこと」。まだはっきりと決めてはいないが、学校の先生など、人と人が出会える環境や人材育成の場に身を置きたいという。理想の先生像は、高圧的に振舞うのではなく、生徒と寄り添うことができる人。「楽しく生きたいし、そのためには近くに人がいてほしい」と強く思うからこそ、彼はよりいっそう人を大事にしている。

好きな女性のタイプは、一緒にいて楽しくて落ち着く人。ずっといても話すことが尽きず、退屈にならない人であれば、なお良いという。「信頼」を大事にする彼だからか、お互いに自分を持って話せること、隠し事をしないことも相手に求めているのだそうだ。

サッカー以上に、人とのつながりや信頼を大事にしているという小林さん。彼には、これから先も新たな出会いがたくさん待っているだろう。彼の未来は輝かしく明るいものであるはずだ。（冷や水）